
サムシング ブルー

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サムシング ブル

【Zコード】

Z7007P

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

「私、またケツコンするのよつ

バツイチの凪子と、そんな彼女に長年片想いをしている隣の真潮との長い恋の行方。

海の近くの街を舞台とした物語です。

前編・後編となります。自サイトでも公開中。

花嫁が、結婚式の時に身につけると幸せになれるといつ、『四つ

のサムシング』 つてヤツがあるらしい。

サムシング ニュー
サムシング オールド
サムシング ボロウド

そして

サムシング ブルー

「真潮まじおつ！」

でつかい声が、頭上からブンと落ちてくる。

俺は、迷わず声の方を見上げた。

「馬鹿でつけ一口！」

アハハと笑いながら一階の窓から顔を出しているのは、隣に住む

凧子なぎこだ。

頭には、ふわふわのレースなんかを載せている。

「アンタさあ、それ何さ。で、何してんの？」

同じ年のお隣さんは、相変わらず能天気に毎日を過いでやれている

ようだ。

「えへへつ」

顔の前に垂れてきているバサバサとした長い髪を氣にもせず、凧子は俺を見下ろしていた。

レースの布と長い髪がハラハラと垂れ下がり、まるでグリム童話に出てくる、なんとかという姫の様だ。

「綺麗でしょ？ これね『ウエディング ベール』なんだつ

なんだつ？ 今、アイツ。『ウエディング』つて言つたか？

「私、またケツコンするのよつ」

「はあ？」

お隣の青柳 凪子サンは、既に『バツイチ』の『ご身分』であった。

「ねえ、田中 真潮クンつ。花嫁が、結婚式の時に身につけると幸せになれるつていう四つのサムシング、知つていいる？」

「四つのサムシング？」

やれやれと仕事から帰つてきたと思ったたら、今度は凪子サマのお相手だつた。

近所の商店街にある馴染みの居酒屋で、俺らは飲み始めた。

凪子は夕食が済んでいた様で、形ばかりの中ジョッキを目の前に置いてちびちびと飲んでいた。

「そう。サムシング。それ知らなかつたなあ。だからダメだつたのかなあ」

呆れた氣持で、『鳥軟骨のから揚げ』をパクつく。

違うだろうが。アンタがケツコンした、『大学時代の先輩』とやらには結婚前から半同棲の彼女がいて、結婚後も切れてなかつたんだろうが、つて。

だから、たとえいくつサムシングを揃えていたところで、あの結婚はダメだつたんじやないかつて。

「まあ、ケツコンなんて、『宝くじ』みたいなもんだしな」

気休めにもならない事を言いながら、箸で『ピリ辛ねぎサラダ』をつづく。

白髪ねぎがシャキシャキとしていて、たまらなく美味しい。

「でね、真潮。今度の彼は、凄く真面目そうな人なんだ
ハイハイ、と思う。『真面目そうな人』ね、と。

たしか、お別れしたダンナサマの事は『誠実な人だ』つて言つてたよな。

「ワシ、アンタの国語表現力を信じてないから」

大ジョッキのビールに口をつける。

グラスは白く曇るほど、キンキンに冷えていた。

ピリピリと冷たく喉にくる、こんなビールは最高だった。

「私の国語表現力つて何よ」

不機嫌そうな顔をして、凪子が無造作に自分の髪をスー^ツといじつた。

その仕草から田をそらす様に、僕は壁に張つてあるメニューを見る振りをした。

「あつ。『タコキムチ』だつて。凪子もキムチ好きだよな」

通りかかった店員さんに、追加注文をした。

「で、何よ。その表現力つて」

凪子の言葉に、ぎゅっとビールを飲む。

「国語2」

凪子のはつきりとした二重の田が、どんぐりみたいに大きくなつた。

「なにそれ」

「アンタの中高の成績」

「そんな昔のこと」

「いや。アンタの悲劇は、そこにあると俺はみてるけど」

早速運ばれてきた『タコキムチ』に箸をつける。

「つまりさ。『言葉』つていうのは『パワー』がある訳よ」

「また、ウンチクですか？ センセ」

確かに俺は、『センセイ』してます、中学校で国語の。

「そうそう。まあ、聞きなつて。つまり、言葉を口に出すとそれが耳に入るだろ？」

「センセ。『耳』以外の場所に入つたら困ります」

「アンタ、うるさいよ。で、それが耳に入ると、当然脳みそがその

『言葉』を聞いたやう訳だ」

「何を」

「つまり『あの人は、眞面目なそうな人よん』ってさ」

「別に、いいじゃない」

「そろそろとさ、脳みそは情報としてインプットしちゃうんだよ、『何がし佐助くんは、眞面目そうな人よ』ってさ」

「彼。『佐助』って名まえじゃないけど?」

「まあ、名まえは何でもいいのつ。で、脳みそにその情報が保存されると『ウヘルカム。凪子の勘違にワールドへ』って運びになる訳さ」

「よくそんな『ほら話』が、次から次へと浮かぶわねえ。眞潮つて」

「ほらほら、そういうことを言つと『ほら吹き眞潮』って言つのがアンタの脳みそにインプットされるでしょ? 困るんだよね」

「もうつー! ばかばかしいんだから」

「だあ、ねえ」

ホントバカバカしい会話だつていうのは、了解しております。こんな実りの無い話を、わざわざアンタに話すなんてさ。いくらこんな警告じみた事を吐いたところで、凪子には少しも伝わりやしない。

いつだつてバカみたいに、いい加減な男にひつかつて、拳句の果てに捨てられて。

凪子の恋の歴史は、その繰り返しだ。

惚れっぽくて、男をすぐに信じちゃつて、お人よしで鈍感で。でも、悔しいけれど。

そんな凪子がたまらなく可愛かつた。ずつと好きだつた。

「まあ、誰とケツコンしてもいいけどさ」

独り言の様な台詞を吐いた。

凪子が俺を見ながら、ちつとも減らない重そうなジヨックに、ちまつと口をつけた。

「ともかく、幸せになつてくださいよ」

ホント、そうしてくれよ。

俺のモノになりやしないの、ひらひらと舞い戻つて来なさんな
よ。

パーティード派手に幸せになつて、でもつて、早く俺にアンタを忘
れさせてくださいよ。

「バーク」

そう言つと凪子は、幸せそうな顔をして、コトントジヨツキを行
ーブルに置いた。

お隣が、なんだかあわただしくなつてきた。

「一度目とはいへ、やはりおめでたい話はおめでたいらしい。

「凪子ちゃんみたいに、一人で一回する人もいるのにねえ」

母親は新聞紙の上で縄さやの筋を取りながら、俺の事をちらりと
見た。

「真潮。あんたイイヒト、誰かいないの？」

そして今度は、俺をわざと見ない様にして聞いてきた。

「イイヒトねえ」

「何なら、お見合いでもしてみない？」

「はあ？」

「まあ、そういう話もあるつてことよ。一応、考えておいてね」

さあてと、と母親は言いながら立ち上がると、筋がのつた新聞紙
をぐるりと纏めて屑箱にポンと入れた。

「真潮」

「 よお」

夜の「コンビニ」で、凪子に会つた。

凪子の持つプラスチックのカゴの中には、いくつかの種類のチョコが入つていた。

「 チョコ女、健在だな」

にやり、と笑つて凪子を見た。

「 あつたぼ よー 新製品よ。見逃せないでしょ。しかも、コンビニ限定品」

威張つたよ、凪子がカゴの中身を俺に見せてくる。

「 真潮は、何か買いに来たの?」

「 あーつ、と。雑誌、なんか適当にね」

「 ふうん」

雑誌の「コーナー」に足を進める俺に、凪子もトコトコ付いてきた。

「 進んでるの? 『成婚』の準備とやらせ

「 社交辞令として、一応聞いてみる。

「 ああ。そんな、直ぐにって訳じやないのよ、全然

落ち着きなく、凪子がチョコしか入つていらないカゴを揺らしていった。

俺は、雑誌の棚にあるスポーツ雑誌を手にした。
パラパラと雑誌の内容を見る。

「 それ、買うの?」

凪子も俺に並んで、雑誌を捲りだした。

「 どうすつかなあ

そう言いながら、凪子の腕にぶら下がつていたチョコしか入つてないカゴをぶん取つた。

「 ありがと、真潮」

「 どうイタバシ」

「 イタバシ? もうつ、バッカねえ」

ケタケタと凪子が笑う。

無邪気な笑顔を俺に向けて、凪子は隣に立っていた。

こんな、まるで『気のいいトモダチ』の役目なんかする自分に嫌気がさす。

コンビニの蛍光灯つてヤツはやけに明るいんで、俺は自分の嘘がその光に暴かれやしないかって、冷や冷やとした。

「ねえ」

「なんだよ」

「真潮さま、お財布、持ってる?」

「うん」

「実は、忘れちゃったんだ。私」

そう言つと今度は、悪戯そうな笑顔を俺に向けてきた。

コンビニを出入りする瞬間に鳴るチャイムの音に慣れてしまったのは、いつ頃からだろう。最初は気になつたこの音も、何度も来るうちに気にならなくなつた。

音つてモンはそんなモノなんだろう。いつの間にか慣れて、いつのまにか馴染んでいる。

凪子は、一人娘だった。

上に姉が一人いる三人キヨウダイのウチとは、随分様子が違つた。

二人ともとつぐに嫁に行つた訳だけど、現役時代（？）の我家は、そりやかしましいと言うか、うるさいと言うか、大騒ぎだった。それに比べて、凪子の家は静かだった。

ただ、朝の「行つてきます」と夜の「ただいま」の声だけは、俺の部屋にいても聞こえてきた。

凪子が一年と少し前に嫁に行つた時は、当然の事だけどピタリと

その声はしなくなつた。

凪子の声が聞こえない。

それだけで、隣の家はシンと静まりかえつたように思えた。
調子が狂つた。自分の生活から何かが欠けてしまつたといつ虚無感があつた。

なのに凪子は、去年の秋にふらりと戻つてきつては（まあ、離婚していた訳だけど）まるで結婚などしていなかつたかの様に、以前と何ら変わりなく暮らし始めたのだ。

そしてまた、凪子は嫁に行くのだといつ。

このお嬢さんは（お嬢さんと呼ぶのも段々と微妙なお年頃だが）、一体何を考えて日々暮しているのだろう。

こつちのそんな気も知らずに、鼻唄なんか歌いながら凪子は俺の隣を歩いている。

『TSUNAMI』なんか、歌つている。

何だか、腹が立つ。

歌つなつて、その歌をアンタが。

むしろその歌を歌うのは俺だろうが、つて。

「波の音がするね」

鼻唄が止まつて、かわりに凪子の声がした。

さわさわと絹糸みたいに、凪子の髪が海風に乗り、揺れ、闇に溶ける。

手を伸ばして掴まえたくなる。触りたくなる。

「ああ、そうだな」

凪子に答えた。

ザザザザザ、ザザザという音が、くり返し耳に優しく響いた。

あのコンビニは、海に来た人を日当て建てられてるので、俺たちが住む家よりも、若干 海に近かつた。
海の音も強く聞こえた。

「なんかさ。ほつとするんだよね。波の音ついて」
「ああ、そうだな」

波の音。凪子の声。
本当に、ほつとするよ。

「ねえ。なんで波の音がほつとするか知ってる? 田中センセイ
悪戯な瞳を輝かせて凪子は俺を見る。
たいていこいつら表情のときは、凪子は答えを知っているのだ。

「ん、そうだなあ」

ワクワクした表情を凪子は俺に向けてくる。
お姫様は、答えをお待ちの様だ。

「心臓の音に似ているとか?」

適当に答える。

「えつ? そうかなあ。そうかもね。どうしちゃつ」
途端にシコソとした顔に凪子はなつた。

「なに。アンタ、答え知っている訳じやなかつたんだ」

「うん。今ね、ピーンと思いついたから、真潮に言つてみたの」

「なんだそりや」

訳がわからん。

「で、アンタの答えを言つてみそ」

「ん。私の答えはね『あかちゃんがお母さんのお腹の中につる時の
音に似ているから』なんだ」

あかちゃん?

「へえ、でもさ。なんか、いいね、その答え」

「でしょ?」

「でも、なんで『あかちゃん』?」

「ああ。うん。実はさ、私の彼。産婦人科のお医者さんで」

「はあ?」

「で、なんか。まあ、ね。私も色々と詳しく述べなったと言つたか」「へえ」

今度のお相手は医者かよ。

「玉の輿じゃん」

「ん。でも、そんなんじやないよ」

？ 凪子の今の表情は少しへんだった。

悲しそうな。

でもまさか。なんで悲しそうな顔するんだ？

「あのや、私、前から真潮に聞きたかったんだけどさ」「いつになく真面目な凪子の声だつた。

「真潮は、この町から出ようと思った事はないの？」

それは、俺にとつては思いがけない質問だつた。

「考えた事、ないな。この町好きだしさ。就職だつて、ここから通える私立の学校をわざわざ探した訳だしね」

ふーん、と凪子がつぶやく。

「真潮のお姉ちゃんたちはわ。みんな遠くに行つたよね」

そうだ。旦那の仕事の関係で、一人は海外に、一人は東京に。みんなバラバラの場所で暮している。

「でも真潮だつて、いつかはケッコンする訳でしょ？」

「まあ、そただけど」

「そしたら、引っ越しすることになるでしょ？」

「まあ、そうなつてもさ。こここの地元で適当に家を探して暮すよ」

「へえ」

「だから、俺のオクサンには、もれなく『海』が付いてくるといつ

訳さ

「ふふふ、と笑う凪子の声が波音に混じる。

「なに、それえ」

「いいだろ」

「ぜ～んぜん。第一、その言い方つて、まるでここの海が真潮のものみたいじゃないの。へんくさーい！」

「ちえ」

「もしかして真潮つて、いつもわざわざつて女の子口説いているわけ？」

「あつ。ばれたか

「バレバレよお」

凪子は嬉しそうにケタケタと笑う。

俺も、そんな凪子の笑についてつられて、声だけで笑つてみた。

でも、心臓は。ジリリと焼け焦げる様に痛かつた。

「もれなく『海』付きかあ」

凪子がつぶやく。

「じゃあ、お見合いの彼女もさ、海が好きな人だといいね」「ひゅつと息が止まりそうになつた。

うちの母親と凪子の母親の情報速度は、光通信も真つ青だ。

「真潮つてさ、お見合いするんでしょ？」

「ああ。わからん」

なんでこんな会話を、せにやならんのかいな。

全く、男として問題外の立場にあることを思ひ知らかれてしまつ。

「真潮も結婚かあ」

「だから、そうと決まった訳では」

「なんか、真潮が結婚なんてさ。実家が無くなつちやう様な気分よ

「なんだ、そりや」

「ん。だつてさ、なんか真潮がいないじやない」

「あ？」

「実家に帰つたつて気がしないじやない」

俺は、アンタの兄ちゃんかいな。

「じゃ、俺はアンタが実家に帰つたつて実感でわるよ」さつと家に張り付いていると?」

「そうそう」

「なんじゃい、それは」

「いいでしょ」

「よかねえよつー」

「だめか」

「一体、人をなんだと」

「だから、真潮のお姉さんたちがや」

「は?」

「つて、またうちの姉たちの話かいな。

「ううん。あつ、つまりね。私はずっと真潮が羨ましかつたの」

「なぬ?」

「ほら、真潮の家つてなんかいつも賑やかでさ」

「あれは、『うるさい』つて言つんですね」

「ん。まあ、実際に住んでいる人はそつなのかなあ。でもね、真潮のこと、ずるいって思つてた、ずつと。私もキヨウダイ沢山欲しかつた」

「あんな、姉でよけりや、ドーザげます」

「またまた、もう。ふざけないで聞いて。でね、私は真潮の家が羨ましくて自分でも早く家族を沢山作りたいと思つたの」

「へえ」

「真潮だつてそうでしょ?子どもが沢山いる、そんな家庭がいいでしょ?」

「子ども? 考えたことなかつたけど。まあ、そつなのかな? そななのかもしねないなあ。」

「ああ、そつかもね」

「ねつ。そういうモノよ」

「そんなモノですかねえ。」

「真潮なら作れるわよ、賑やかなカゾクを」

「そうか？まあ、なるようになるというか。しかしあ。そんなこと考へて結婚するなんてや、凪子も変わつてゐるねえ」

「へへつ。まあ、それで一回失敗したけどね」

「まあ。そうだあねえ」

「でさ、お姉さんが次々とお嫁に行つた時だけじゃあ」

「ああ」

「凄く寂しかつた。なんか、真潮の家がシーンとしちやつて」

「……」

「でもね、その時に。たまになんだけどね。真潮の声が聞こえたり、真潮が出掛けの音が聞こえたりして。凄くほつとしたんだ。なんか、『ああ～よかつた』って」

「ふーん」

「私の結婚が上手くいかなくて、帰つてきた時もそつだつた。真潮がいたから。なんか、『ああ、帰つてきたんだ』ってほつとしたし」

「『し』『?』

「うん。嬉しかつた

「へえ」

意外な凪子の言葉だつた。

「まあ、さつ。あと一年くらいは俺も結婚しないだろつから。一度田もダメになりそうになつたら、一年以内に戻つてきなさい」

「もう。やな事いうわね」

「親切心と呼んでくれよ」

「それもそつか」

凪子がクスクスと笑い出す。でも、その笑いは直ぐに止まつてしまつた。

「どうした？」

心配になつてついつい訊ねてしまつ。

「私ね、真潮。今度はうんと遠くに行く事になるかもしれない」

離婚するまで凪子は、ここから自転車で一十分もかかる町に

住んでいた。

「彼の仕事場が変わるらしいへ。で、そこはね、海の見えない町なんだつて

「へえ」

凪子が結婚する事はもう当然知っているというのに、面と向つてこんな言葉を聞くと、情けないけど動搖してしまった俺がいた。

早く俺から離れて欲しい、どこか遠く 視界の範囲外に行つて欲しいと思っているのに、心のどこかに相反する気持があり、それが拭い去れないのも事実だ。

二つの気持がグルグルと、終わりがないかのように回っている。「海が見えないって事は、潮の香りも、波の音もしないって事かな

凪子が俺に、確認するかのように聞いてくる。

「まあ、恐らくね」

恐らく？ 嘘だよ。 せつと波の音は、聞こえない。

「だよねえ」

そうだよ。

「じゃあ、今度こそサヨナラってワケだ。『海』とも」

俺もわざと明るく振舞いながら、酷くつづくペラ声を出した。

「そつか。サヨナラか。海とも」

凪子は、自分の髪をひょいと耳にかけた。

そして、今度は自分に向つて確認するかのように、小さな声でつぶやいた。

「サヨナラ、なんだね」

そうだよ、サヨナラなんだよ。海とも。

そして、俺とも。

天気予報によると、来週の初めには、いじごらも梅雨入りするらしい。

晴れた海が見られるのも、今日明日の土日が最後かもしれない。ガサガサと、母親が食堂の机の上で宅急便の包みを開けている。父親は、小学校時代のクラス会の幹事会とやらで朝早くから出かけていた。

「あらら」

包みを開けながら母親が声をあげる。

その箱には、母親あての雑貨の他にもう一つ別の袋があつた。

「なに、それ

俺は、少し遅めの朝食を食べる為に珈琲をカップに注いでいるところだった。

「美波からの宅急便なんだけど」

そう言いながら一番田の姉の美波からの荷物に同封されている封筒をパラリと開けた。

「これ、凪子ちゃんに渡してくれって」

凪子？

「なんでも、結婚式で使うサムシングがひとつついて」

ああ、四つのサムシングか。

あいつ、あの事は冗談じゃなかつたんだな。

「真潮、これを凪子ちゃんに渡してください」

「ええ？」

「ご飯食べてからでいいから」

「ああ。まあ、解つたよ」

食卓の上にはトーストとベーコンとグリーンサラダが載っていた。

横田で、その荷物を見ながら、俺は熱い珈琲を一口飲んだ。

びゅんびゅんと、海沿いに続く道を自転車で走る。空は高く、雲ひとつない晴天だった。

海も穏やかで、吸い込まれそうに遠くまで遠くまで続いていた。夏の海が好きだと多くの人は言つだらうけど、梅雨に入る少し手前のじこの季節にも属さないかの様なこんな海が、俺には一番綺麗に見えた。

『凪子は、海に行くつて言つて出かけたんだけど』

母親に頼まれて行つた凪子の家で、おばさんがそう教えてくれた。

まあ、出直してもいいんだけど。

今日は、せつかくのいい天気な訳で、自転車で海まで飛ばすのも悪くない気がした。

だから、姉からの荷物を紙袋に入れたままで、そのまま海へと向つた。

姉からの預かり物は、『白い靴』と『レースの手袋』らしい。

どっちが『オールド』で、どっちが『ボロウド』か。

そんな事を考えながら、好きな女の花嫁道具を運んでいた。しばらくじぐと、はるか先に日傘を差して座る女が見えた。

凪子だった。

凪子は、道路から海へと降りていいく階段の一番上にノースリーブのチェックのワンピースを着て、座つていた。

日傘の色はあらうことか、真黒だった。葬式みたいだった。近づく俺に気がついたのか、傘を持ちながら手を大きく振つてく

る。

「なにしてんだよ」

声が届きそうな距離になり、凪子に声を掛ける。

「日光浴よ」

凪子が笑う。

「真黒な日傘をしてかよ」

俺も言い返す。

「だつて、日焼けしたら困るもん」

言つてゐることが矛盾してゐつて。

まあ、黒は紫外線をブロックしやすい色いらしゃいナビや。

でも、やはりぎよつとする。『黒の日傘』は。

凪子の側まで来た俺は、道路脇に自転車を止めて凪子の後ろに立つた。

凪子は、アイスを食べていた。

「アンタ。いい身分だな」

棒の付いたチョコアイスだった。

「いい身分でしょ」

二カつと笑つた凪子の唇がチョコ色に染まつてゐるのが見えた。紙袋を持つて、凪子の隣に腰掛けた。

「海、綺麗だね」

凪子が言つ。

「ああ」

俺も答える。

「私、一年の中で一番この時期の海が好きかなあ

「へえ」

へえ、なんて愛想のない返事で誤魔化す。

そつか。凪子も、俺と同じような事を思つていたんだな、と思つた。

「はいよ

ポンと、凪子と俺の間に紙袋を置いた。

「プレゼント?」

「誰が、誰にじや

「えへへ

凪子の日傘を持つてやつた。

凪子はアイスを口にくわえながら、がむしゃらと袋の中をこじりだ

す。

そして一番上に載つた、姉からの手紙を読み出した。

相変わらずアイスは口の中に入つたままだ。

「たれるよ

「んんんん、と言いながら、凪子は手紙を紙袋に戻し、アイスを手に持ち食べ始めた。

「美波ちゃんにお礼を言わなきや」

細く小さくなつたチョコのアイスが、ぱくつと凪子の口に入つた。

左手には、茶の色を残したままのアイスの棒だけが残つた。綺麗に塗られたマニキュアの指と、チープな感じのアイスの棒が、妙な違和感を醸し出していた。

口をもごもごさせながら凪子が話す。

「あとは、ブルーだわ」

「ブルー？」

「そうそつ。サムシングニーのドレスとブーケでしょ、オールドの靴と、ボロウドの手袋と。だから、あとはブルー」なるほど。その『ブルー』ね。

「あの方、質問していい

「どーぞ」

「同じ美波姉から借りたもので、オールドとボロードに分けるのって、反則じゃないの？」

凪子がぶつとした顔になる。

「いいんです。気持の問題だから」

偉そうな顔して凪子が話す。気持の問題、ね。

そんなもんか。

「ブルー。どうじよ」

「青いパンツでも履きやあいいじやん」

「青パンかあ」

「略すな」

「でも、いい考え方」

「冗談だろ?」

「冗談に決まつてんじゃない」

ケタケタと笑う凧子のでかい口には、やっぱりチョコがついていた。

「チョコ」

「えつ?」

「チョコが」

「ああ、アイス食べたかった? 真潮も」

「誰が、食いたいって?」

凧子は左手のアイスの棒を見ている。

「もう、残つてないしねえ」

だからアイスを食いたい訳じゃねえつ

ガサシユツという紙袋のつぶれる音がした。

あつ? と思つと、俺の直ぐ前に凧子の大きな一重の目が見えた。

その目には、俺が映つていて。

次の瞬間、唇に冷たい感触がした。

自分の頬に、凧子の髪が触るのがわかつた。

俺は、黒い日傘を差したままだつた。

何が、何だかわからなかつた。

「今の」

自分でも、情けないくらいの間抜けな声だつた。

凧子は、特に変わつた風でもない顔をしている。

「お味見、チョコアイスの」

平然とした声で凧子が答える。

うろたえているのは、俺のほうだ。

「あつ、ああ。味見ね」

ここで動搖しては、かつて悪い気がして俺もそう答えた。

凪子は黙つて海を見ている。

俺は急に居心地が悪くなつてきた。

と、いうよりも。一刻も早くここから逃出したかった。

「み、美波姉からの荷物は、渡したからな。あと、これつ」
そう言つてブンと、日傘を凪子に差し出す。

凪子は驚いたような顔をして、俺を見た。

「日光浴だけど、日焼けは困るんだろ」

そう言いながら俺は、ひょいと立ち上がつた。

「俺、帰るから。アンタも、気をつけて帰れよな」

まともに凪子の顔が見れないくらい、心臓がバクバクしていた。
こんな姿を生徒に見たら、絶対にバカにされてしまうだろう、
という程の狼狽ぶりだった。

俺は急いで自転車を方向転換せると、それにまたがり、じきだ
した。

視界から凪子は消えたけど、背中ではおもこつきり凪子のことを
見ている自分がいた。

そんな俺の背中に向けて、凪子が何かを言つてきた。

バカ マ シ オ

凪子は、確かにそう言つた。

「田中先生、国語辞典の納品の確認をお願いします
「あつ。はい。ありがとうございます」

学校事務の杉崎さんに声を掛けられて、席を立つ。
ヒタヒタと冷たい廊下を歩きながら、窓の向こうに見える海を見た。

梅雨の海は、どんよりとしていた。

予報通り、『さつぱりと、梅雨が来た』と思つた。

あれから何日か過ぎたけれど、凪子とは顔をあわせていなかつた。

学校の玄関ホールに、幾つかの段ボール箱が積まれていた。
毎年のこの時期には、新入生向けの辞書の共同購入をしていたのだ。

ふと、ダンボールの隣に立つ男性に目がいった。
去年までの担当さんは、背格好が違うよつに見えた。
以前の人より一回りは背が高いその人が、俺の足音に気がついた
のか、ぱつとこちらを振り向いた。

「えつ」

思わず声が出てしまった。

あちらさんも、俺の顔を見て言葉を失つていた。

「あつ。こちらの会社で働かれていましたっけ」

俺からいの言葉に、相手は苦笑いをした。

「担当替えがあつてね。まあ、君が学校の先生だつて事は、凪子から聞いてはいたけど。よつによつて、ここの中学校だつたとはね」

そう言いながらダンボールの隣に立つ男性は、凪子の別れたダンナだつた。

納品の数を確認したあと、段ボール箱を台車に載せて、一階の空き教室へと運んだ。

明日から、ここで辞書の引き渡しを行なうことになるのだ。

空き時間だつた俺は、なんとなく凪子の元ダンナをお茶に誘つた。といつても、紙コップ式の自販の珈琲なんだけれど。元ダンナは確か、俺たちよりも二つか三つ上だった。ということは、もう三十は過ぎているのだろう。自販の側に置かれた、細長いプラスチック製のベンチに一人離れて座つた。

「凪子は」

「えつ？」

元ダンナが、とつとつと話し出す。

「彼女は、元気なんだろ？か」

「……元気ですよ」

凪子とは、一切連絡をとつていないとこつことだらうか？

「ああ、そつか」

それきり、また元ダンナは、ふつりと黙つてしまつた。

元ダンナの左手が目に入る。銀色の細い指輪が光つていた。

「再婚、されたんですか？」

非難を帶びた声で聞いてしまつ。

「ああ。子どもの為にね」

「子ども？」

「えつ？ 子ども？」

驚く俺の反応を楽しむ様な表情をして、元ダンナが口を開く。

「凪子から聞いてない？ できたんだよ、子どもが。で、凪子は家を出たつてわけさ」

「最低なヤツ。」

「へんなもんだよな。あんなに子どもが欲しくないって言ったアイツに子どもが出来て、子どもが欲しくてしおうがない凪子は産めないなんて」

「『産めない』？」

「ああ、いくらお隣さんでもそこまでは話さないよな。凪子、子どもが出来にくい体质らしんだ。結婚してから解った事なんだけれどね」

目の前が真っ暗になる。 そんな話は、聞いてない。

「まあ、勿論。離婚の原因は、それだけじゃないけどね」

この人の、凪子の全てを過去として話す姿を不思議な気持で見ていた。

凪子は生きているし、凪子の体质の事だつて今まで続いている現実の事だろうに。

ふと、凪子と交わしたコンビニ帰りでの会話が頭に浮かんだ。

『実はさ、私の彼。産婦人科のお医者さんで』

そうだ。絶対にそうだ。

紙コップの珈琲を飲みながらこの人は明日のお天気を気にするみたいに凪子の体の事を話すけれど、凪子の中では今でも向き合っているリアルな問題に違いないだろうって思えた。

腹立たしい。

この人に。

そして、そのことを凪子の口から直接聞く事ができない、自分の立場に。

ふつーと、元ダンナは熱そうに紙コップに口をつけた。
俺は、そんな彼の仕草を、ただただじつと見つめていた。

遅くなつた帰り道、暗い雨の中を家に向い急いで歩いていた。

サ といふ霧状の雨は、顔や体にじわじわとその水分を撒き散らしながら降り続けている。

ジジジジと、街灯が嫌な音をたてて点滅していた。

傘なんか差しても、ほんの気休めにしかならなかつた。

家の近くまで帰りついたとき、大きな声と共にお隣さんの玄関からぱつと飛び出す人の姿が見えた。

凪子だった。

花柄の傘をバツと広げて歩き出す凪子と、直ぐに視線があつた。

「オカエリ」

凪子から、声を掛けてくれた。

「あ。ああ」

昼間の事を思い出すと、俺はうまく挨拶が出来なかつた。

「あーっと。ブルー！」

へつ？ という顔で凪子が俺を見る。俺だつて自分で言つた「ブルー」の言葉に、へつ？ と思つた。

「ああ、つまり。ブルーは？ サムシングの。見つかつたかなあつて」

恐ろしいくらいメチャクチャな文法だつた。

しかも、唐突な話題提供。

「ああ。ブルーね」

俺の横を通り過ぎようとしていた凪子は、雨の中そのままの場所で立ち止まつた。

凪子の髪にも、パツと小さな水滴がついていくのが見えた。

「ブーケのね、その中に見えないよう青い花を入れるのが普通なんだつて」

ブーケかあ。

「へえ。青い花をね。いいね、それ。じゃ、一件落着か」

「まあな。でも。違うのよね」

「何が？」

ブーケに青い花を入れるのは、青いパンツを履くよりもいい考えだと思ったが。

「私が本当に欲しいブルーは、それじゃないのよ」

「本当に欲しいブルー？」

「うん。本当に欲しいブルー」

ブルーねえ。

「昔テレビで、あつたよな。ブルーとか、レッドとか、イエローとか」

「最近はブラックもあるらしいよ

ぶ、ブラック？」

「へえ。今度ちびに聞いてみよう

なんて、言いながらヤバイと思つた。

『ちび』なんて子ども連想させる言葉を、凪子の前で出す自分の無神経さに冷汗がである。

「ああ、美波さんとこの？」

凪子も「丁寧に話しつづけてきやがる。ますます、冷汗だ。

「あつ。ああ。つ、つまりだなつ！」

「な、なに？ 突然大きな声出さないでよ。びつくつするでしょ」

「あつ。ごめん、つまり俺が言いたいのは」

「なによつ？」

「だ、だから。その。サムシングもいいけど、幸せになつて欲しいとアンタに」

「……」

「メチャクチャ幸せに」

くるんと傘を回しながら凪子が笑つ。

「メチャクチャつて、あんまりいい響きじゃないけどねつ」

「えつ？ そうか？」

国語2の凪子に言わってしまった。

「でも、やうね。うん。がんばる」

そう言つて口角を上げただけの微笑を、凪子は俺に向けてくる。

心配になる。

「だ、だから。少しくらい気に入らないブルーでも大丈夫だつて」
自分の発言ながら、意味不明だつた。

「そつか。そうね」

そんな励ましにも、凪子は相槌をうつてくる。
じうじうといふ、本当に凪子は優しい。

「でもね」

再び凪子が傘をぐるんと回す。

「気が付かなかつたけど、私はそのブルーがずっと欲しかつたの。
その事に私つてば、今ごろようやく気が付いちやつて
そんなに悲しい顔をして、凪子は一体どんなブルーを諦めたとい
うのだらう。」

「凪子」

「でも、いいの。気が付くのが遅かつたの。欲しいものが手に入ら
なくてだだをこねるなんて、子どものすることだものね」

そう言つと、ひらひらと手を振つて凪子は雨の道を歩き出した。
霧雨の中、まるでどこかに消えてしまふくなるくらい、凪子
は独りだつた。

なんだ。

なんだ。

なんなんだ？

そんな凪子の姿に、胸がざわついてしまつ。

その晩、夢をみた。

眩しい光を感じながらそつと田を開けると、そこは砂浜だった。

大昔の頃の夢だ。

みんな小学生の姿だった。

これは全くの作り物の夢って訳でもなく、どちらかといふと回想する様な夢だった。

姉さんや凪子のワンピースには見覚えがあった。

真波姉は、ひまわりのワンピース。

美波姉は、さくらんぼのワンピース。

その隣には、麦藁帽子をしつかり被った凪子が紫陽花のワンピースを着てニコニコしながら立っていた。

俺は、半ズボンなんか穿いていて裸足で砂浜を走りまわっていた。

ギュギュとしなる砂の感触を足の裏にくすぐつたく感じながら走っていた。

そんな俺を他所に、姉たちと凪子が砂で城を作り出し始めた。

砂浜の上には、赤や黄色のカラフルなバケツやシャベルがあつてみんなそれぞれの道具を使って城を作っていた。

姉たちから俺に、バケツに海水を入れて運べとの命令が下った。触らぬ神になんとやらで、俺は大人しく海水を運び始めた。

最初こそ、少なめに海水を入れて運んでいた俺だけ、段々と面倒になつて（なんで俺がやるんかいな！と）バケツに出来るだけ一杯一杯に海水を汲むようになつていつた。

ぐいぐいと、満水状態のバケツを、うんじょうんじょと運んだ。プラスチックの柄の部分が、ういんとしなるのが分かる。やばいかなあ、と思つた。

俺の視界には、ワンピースを砂まみれにしながら城を夢中で作る凪子が見えた。

姉達はさすがに年上なだけあって、ワンピースの裾が砂に付かないように注意しながら遊んでいた。

ぱつと凪子と目が合つた。

すると、凪子は砂まみれのままで僕の方に走ってきた。

凪子が走るたびに、腕から、膝小僧から、ワンピースから、砂が飛び散った。

「真潮！」

凪子が、俺の名を呼ぶ。

「見てつー！」

そう言つと凪子は、俺の後ろを指差した。

俺は重いバケツを砂浜に置くと、凪子に言われるがままに後ろを向いた。

ザザザザザザザといつ音とともに、サ つと押しよせる波が足元を濡らした。

日差しは眩しくなつてきたのに、海水はまだ冷たかった。
夏でもない、冬でもない。

名前のない季節の海が、田の中に入りきらないくらい広がつていた。

「キレイ」

引き潮に凪子の声が吸い込まれていく。

波は凪子のつぶやきを、海の底まで運んでいくよつに見えた。
海は、本当に綺麗だった。

海水を没むことばかり考えて、ろくろく俺は海を見ていなかつた
俺に凪子が教えてくれた。

「とってもキレイな青だね」

凪子が嬉しそうに言つ。

青。青といえば。

「『ブルー』だつ！」

夢中になつて見ているテレビの特撮ヒーローの『色』を思いだした。

『青』は『ブルー』だと。

「ほんと、『ブルー』だ」

二人して、げらげらと笑つた。

凪子も俺の影響で、その番組が大好きだった。

そして、二人してナンバー1でないナンバー2の『ブルー』のファンだった。

ブルー。

海。

ブルー？

海？

『真潮だつてそうでしょ？ 子どもが沢山いる、そんな家庭がいいでしょ？』

『本当に欲しいブルーはそれじゃないの』

『真潮なら作れるわよ、賑やかなカゾクを』

幼い凪子が笑う顔と、今の凪子の悲しい顔がダブり。そしてその笑顔は、泡の様に消えていった。

次の日、家に帰る途中に寄った本屋では、レジの側に置かれたラジオから週末の天気予報が流れていた。

『……地方の週末のお天気は晴れ。久しぶりの青空が広がる事で

しう』

「あつ。 真潮。 お帰り」

俺は傘を畳みながら、その声のする隣の家の二階を見上げた。

「この間、美波ちゃんに電話をかけて、お礼を言つたんだ」

凪子は、雨だというのに窓から首を出して、俺のいる下を見下ろしていた。

「凪子」

俺の言葉に凪子がビクンとした。

「今度の土曜、空けといて」

有無を言わせぬ、俺の声の掛け方だった。

凪子は驚いた顔をしながら、俺のことをじつと見つめていた。
そしてその凪子の長い髪は、まるで雨の糸の様に、俺に向つて真
っ直ぐに垂れていた。

天気予報は、驚くほど当たつた。

どこまでも突き抜けるような青空が、俺らの頭上に広がつていた。

そんな中、凪子は仏頂面だつた。

凪子は、自転車と俺を交互に見て心配そうな顔になつていた。
「どこに行くの？」

当然の質問を俺に向けてくる。

「俺が、凪子が欲しい『ブルー』をあげられるところ」
ギクリとしたあと凪子の表情が揺れる。

「真潮。 なに、いい加減な事を言つているの？」

凪子が俺を射抜くような瞳で見つめてきた。

「いい加減な事だかどうか、凪子が確かめればいいだろ」

「……」

「凪子」

「乗るわよ」

自転車は凪子を乗せて走り出した。

「見かけによらずアンタ、重いねえ」「自転車を漕ぎながら凪子に声を掛ける。

「バカ」

凪子の声が柔らかく俺の背中に響く。

「嘘だよ。悲しくなるくらい軽んだけどや。食つてる?」「……バカね

本当にこと。

凪子のあまりの軽さに、俺は不安になつた。

自転車はあつという間に海岸通りに出てきた。

「アンタの欲しいブルーって、海だろ」

俺の背中を掴む凪子の手の力が、一瞬抜けるのを感じた。

「おーい。凪子さん。後ろに乗つてるかい?」

「の、乗つてるでしょ」

「返事は」

「なんのよ」

「だから、アンタのブルーのだよ」

「ああ、どうかな。忘れた」

凪子の声が上ずつている。

「物忘れババア」

「バ、ババアですつてえ! ああ、そうね。うん、そうかもそうかも。真潮の言つ通りかも、これで満足?」

「満足だよ」

「そつ。それはよかつた。じゃ、家に戻りましょ。俺の背中のシャツを凪子がぎゅいと引っ張る。

「凪子の国語力に問題あり」

「な、なにがよ」

「凪子はね、『俺が海をあげる』ってどうこいつ意味だと黙つていろの？」

波音が、BGMのように海岸沿いを走る俺たちの耳に響いてくる。

「知らないわよ」

嘘つきな凪子の声が波音にのまれる。

「泣くかな、母親」

「えつ？」

「泣くかもな、凪子の母さんも」

「……真潮」

自転車を停めて、凪子へと振向く。

「攫つていいんだよね？」

「真潮」

「攫つてから、ダメでも」

そう言つて俺は再び自転車を漕ぎ出す。

背中の凪子は何も言わない。

言わないのをいい事に、俺はどんどん走り続ける。

走りながら、やつぱり不安になる。

「どこに行くの？」

ようやくしたの凪子の声だった。

「役所だよ」

「えつ？」

「美波姉のお古の匂があつたからや、婚姻【匂】

「真潮」

「これぞまさに『サムシング オールド』ってやつだね？」

わざとおじけた口調でそそくさと話してしまつ。

凪子の反応が気になる。

「ばかっ」

凪子の細い腕が、俺の腰にぎゅっと回された。

これは……YESだつ！

体中の細胞がワツと沸騰した感じがした。

シャツ越しに、凪子の体温を感じた。

その温もりは、俺がずっと欲しかつたものだつた。

正直、これから面倒くさい事がごまんと待つてているだろう。それこそ『勘当モノ』のお怒りを受ける可能性もあるんだ。でも。

それでも。

梅雨に晴れ間の、こんな天氣があるよつて、大丈夫、どうにかなるさ。

潮風が優しく吹いてくる。

大きな犬と散歩をする人と通り過ぎる。

空もブルー

海もブルー。

凪子の体温を背中に感じながら。

役所までは、あと少し。

チヨコ ホリック 1（前書き）

「サムシングブルー」の一人の高校編です。
恋愛要素を含む展開です。

チョコ ホリック 1

「真潮^{ましお}、チョコ買^{なさい}つてきて」

お隣りの凪子さんは、そんな言詞を俺に言つてきた。

「一月のこの時期に、なにが悲しくて男がチョコ売り場に行かないといけないんだよ」

教室の廊下側の窓から顔を出して話しつけてきた隣りのクラスの凪子にそう答える。

暖房は効いているけど、廊下は寒い。

凪子が開けた窓からも、ひんやりとした空気が流れ、俺の顔に当たつてくる。

「もう。真潮つたら。この時期だからチョコは必要なんでしょう。」
小ちな声で凪子は早口にしゃべった。

「私だって自分で行きたいわよ。でもさ、そつきの体育の時間に、足を捻つちやつたから」

そう言つて凪子が指で下を指すもんだから、俺も廊下の方に顔を出して凪子の足を見た。

確かに凪子の右足には、しっかりとサポーターがしてあった。

「体育の授業、なんだつたんだ?」

「サッカー」

「女子が?」

「うん」

女子高生がサッカーね。

まあ、それはいいとして。

チョコかあ。

「どこに買いに行くんだ?」

溜息をつきながら聞く。

「えつ？ 行つてくれるの？」

凪子の顔がぱっと輝く。

「駅前のビルの一階の特設会場。今ね、バレンタインシーズンだから、私がお目当ての東京の有名なお菓子屋さんのチョコも入っているよ」

凪子はチョコ好き女だった。

市販のチョコも、限定品が出るといつては、しこたまそれを買つて食つていた。

「なに？ 自分の為に買つとか？」

チョコ「好き女なら、ありうるかもしねない。

凪子は自称『チョコ ホリック』だし。

一日一チョコとか言つている。

ところが、そんな俺のそんな台詞に凪子のヤツは目を真ん丸くした。

「真潮つて、凄い事考えるのね。バレンタインに自分にチョコを買う人つていないでしょ」

凪子が呆れたような声を出して言つた。

ハイハイハイハイ、俺が考えなしでございましたよ。

それじゃあ、なんですかね。

男の俺に、自分が好きな男のチョコを買わすのは、『凄い考えとは言いませんかね？

「俺一人じゃ行かないからな」

そう凪子に言う。

「自転車の後に乗せてやるから、アンタも来なさい」

そう言つた俺の顔を見て、凪子は嬉しそうに笑つた。

制服のままで一人して、自転車に跨る。

一応、凪子の好きな男が学校のヤツって可能性もあるわけだから、学校から少し離れたところから乗せようつか？ と聞いたら、

「大丈夫。今は職員会議中だから」 なんて言つて凪子が舌を出した。

「嘘。相手つて、センセイ？」

凪子はYEDの代わりに、恥ずかしそうに笑つた。

駅までの道を、自転車で走る。

「さつきの話だけどさ。先生つて誰先生？」

冷たい風と、異様に大きく聞える自分の心臓音とで、俺の耳はちぎれそうだった。

「ああ、江崎先生よ。ほら、体育の山田先生の産休で来ている」

「ああ、そういえばそんな先生が来たつて聞いたなあ。

その先生のことと、うちのクラス委員の椿谷がなんか言つてたよ

な。

「聞いてよ、田中。山田先生の代わりに来た江崎つて。あいつ、絶対に女子生徒に手を出す氣でいると思つのよね」

委員会に行く途中の廊下で、そう言ひながら椿谷がブンブンと怒つていた。（実は、俺もクラス委員）

「聞いてよ、真潮。江崎先生つて、とってもいい先生よ」

はあ。

いたよ、「」。

江崎先生に、手を出されそうな女が。

「凪子は、江崎先生にチョ「」をあげるんだね？」

誰の為の確認だよつて思いながら、文章にしてそのことを聞いた。

「うん。ううよ。でもライバル多いからなあ」

うーん、困るのよね～なんて言つて凪子は唸つている。

「あのさ、凪子さん。アンタのその言い方だと、まるで江崎先生とどうにかなりたいつていう風にボクには聞えますがね？」

おいおいおい、凪子。冗談じゃないよ。

いくらなんでも『先生』は、まずいだらうよ。

「バカね、真潮って」

凪子が俺の背中にぴたつと体をつけてきた。

凪子の口が、俺の耳の側に来るのがわかる。

「好きな相手と『どうにかなりたい』って思つのが恋でしょ？」

熱に浮かされたような言葉を、凪子はわざと言つてのけた。じゃあ、それが恋だつて言うのなら。

俺の凪子に対する気持は、もう終つてこるつてヤツだらうか？

「骨川筋子」

背中の凪子に言つ。

「先生を本気で落としたいなら、もう少し肉がついていたほうがいいんじゃないの？」

「ん。そうなのかなあ？」と凪子が言つ。

「特に胸のね」

やう言つた俺の背中に、凪子がゴロンと頭突きをしてきた。

「すげ〜」

凪子の指名のチョコ工房の前には、凄い数の女の子が集まつていた。

「行つてくるわ、真潮」

凪子が足を引きずりながら、そのブースへと向いだした。

「つ、おいつ！ ついていつてやるよ」

凪子の体を守るよつこ、がつしりと抱えた。

「ありがと」

その一言で。

凪子の笑つた顔で、なんでもしてやつちやつ俺は。

終つていいはともかく、かなりの重症なんだらうと思つ。

人ごみを搔き分けて、ショーケースの前に辿りつく。

すると、凧子がいきなり注文をしだした。

「お~お~、ちゃんと商品を見たのかよ」

売り場のオネエサンにお金を渡す凧子に言つ。

「うふふ。事前に完璧リサーチ済みよ」

凧子は、得意げな微笑を俺に向けてきた。

ショーケースの向こうから、紙袋に入つたチョコが凧子に渡された。

「ほれほれ、凧子。それは俺が、持つからさ」

そしてまた人ごみの中を、江崎へのチョコが入つた紙袋を持ち上げながら、俺は凧子を抱えて歩きだした。

「なんか凄い体験だつたなあ」

時間にしたら僅か十分かそこいらのことだと想つのに、体中からエネルギーを吸い取られた気がする。

「凄いでしょ。女の子は、大変なんだからね。だからあ

そう言つて凧子が俺を見た。

「真潮もね、そこんところちゃんと分かつて行動してね」

凧子がにやりと笑う。

「なんだ、そりゃ

「私聞かれたんだ。真潮のクラスの椿谷さんで。『田中君と付き合つているの?』って

「はあ?」

「このこの~。真潮もやるな。椿谷さんって美人だもんね。つてことは、真潮もついに彼女もちか~」

凧子が、ふつ~、やれやれ~、なんて言つてゐる。

「勝手に、言つてればいいさ」

ま、行くぞと凪子に言い、俺は自転車に跨った。

駅前の賑やかな街並みから、段々と住宅街へと景色は変わる。冬の海が、暮れる空色を映し、オレンジ色に輝いてくる。

風は、冷たい。

流石の凪子も寒くなつたようすで、やけにぎやうと俺の体に手を回してきている。

「ねえ、真潮

「ん？」

緩やかなカーブを右へと曲がる。

自転車を漕ぐ足を休める。

漕がなくとも、進んでくれるのだ。

「真潮つて、椿谷さんと付き合つたら、やつぱつひしゃつて自転車の後に乗せたりするの？」

ようやく聞き取れるくらいの小さな声で凪子が言つ。

「いや。乗せないよ」

俺も答える。

「ふーん。そう」

それきり凪子は話にならなかつた。

俺も、そのまま口をつぐんだ。

この話は、お互い深入りしちゃいけない。

突き詰めてしまつと、お互い今いる場所に戻れなくなつてしまつだらう。

俺の望みはそんなことではない。

自分の気持を伝える事じゃない。

ただ、凪子の中で俺を何かに利用するのもいいから、存在価値があつてくれれば、それよかつた。

でも、ずっとそんな気持で、俺はいられるのだらうか？

あるかないか分からぬくらいの、緩い坂道。

ペダルを漕がなくても、自転車に跨る俺たちを坂の下まで運んでしまう、そんな坂道。

それは、歩いていると気が付かないくらいの、穏やかな角度なんだけど。

「気が付いた時は、手遅れってことだな」

ぼそつと言った俺の言葉は、凪子には聞えない。

もう中毒なのかもしれない。

日々、凪子への気持が加速していく。
それはもう、やばいくらいまでに。

ナギコ ホリック

凪子なしではいられない俺が、遙か未来の坂の下で。
惨めに一人転がっていた。

チョコ ホリック 2 (前書き)

「サムシング ブルー」の一人の高校編です。
恋愛を含む展開です。

チョコ ホリック 2

「真潮^{ましお}、チョコ食べたいよね」

「はあ？」

「うん、そうだよね。そつか、そつか。じゃあ、行こひつ」隣りの家に生息している幼馴染兼同級生の凪子^{なぎこ}は、日曜の朝から人んちに来たかと思つたら、コートも着ていない俺の腕をぐいぐいと引っ張り出した。

「な、な、なんなんだよ、一体」

凪子の手首を掴む。

凪子の視線が宙を彷徨う。

「だから、真潮がチョコを食べたいだろうつて思つて、で、チョコ買うのに連れて行つてあげたら喜ぶかなあつて」

「日本語が変だよ、アンタ。俺に、意味が通じるよつて言つてみな

じつと凪子を見る。

「ああ～もう。真潮は硬いんだからつー言えばいいんでしょ！　『チョコを買いに行くの付き合つて』つて！」

ぶーたれて下唇を出しながら凪子が言つ。

「分かつたよ。で、『今年』は、どこまで買ひにいくんだ？」

凪子の瞳がパツと輝く。

「恵比寿！」

……そりや、このヒトは、そんな場所まで、一人で辿り着けないよな。

俺たちが住む街から恵比寿に行くには、電車に三本乗らないとい

けない。

「なんかね。『バレンタイン チョコフロースティバル』っていうのが開催されて、外国とか国内とかの小さなお店のおこしいチョコが集まるらしいのよ」

電車の中で、隣りに座った凪子が雑誌を広げ出す。

きっと、去年江崎先生の為に駅ビルのチョコ売り場に行つた時とは比べ物にならないくらい、会場は混んでいるんだろうなあと思うと寒気がした。

結局、凪子は不幸なんだか好運なんだか知らないけど、江崎先生には相手にもされなかつたようだ。

また今年は違うヤツにチョコをあげるんだろう。

今度は、誰だらう？

ガタガタと進む電車の中で、『ゴソゴソ』と凪子が鞄の中からポツキを出した。

「真潮、食べる？」

ポツキは食べかけみたいで、すでに封は開いていた。

「電車の中でも、ものは食わねえの」

凪子の持つポツキの箱」と、上から押されて鞄に戻した。

「えへ。電車の中で食べちゃダメなの？」

「マナー」

「じゃあ、新幹線の中でもお弁当とか売つてるのは何でよ

「乗つている時間が違うだろ？」

「同じよ。だって、遠いもん。東京」

確かにそうだけど。

「じゃあ、一本だけな」

「えへ。まあ、いいや。一本食べよ」

そう言つて、凪子は鞄からポツキを一本出して、また『ポツキ

ポツキ』食べ出した。

「そつそつ、この間私ね、自分でポツキ作つたんだ」

「はあ？」

「えへへ。プリツツ買つてね、溶かしたチョコを回りに付けたんだ」

得意げな顔で凪子が言つ。

「意外と均等にチョコを付けるのって難しいんだよね

「へえ」

凪子つて、本当に人と少しづれることをするヤツだよなあ、と感心してしまつ。

「美味かつた？」

「ん？」

「その手作りポッキ もどき」

「そうねえ」

凪子の大事なポッキ は、もつチョコのない部分しか残つていなかつた。

「あれはね、アイデア勝負だから。こっちの方がやつぱり美味しいかも」

そう言つて、凪子は残り部分をパクッと口に入れた。

ようやく、といった感じで恵比寿に着いた。

確かに、これなら新幹線で静岡に行つた方が時間的に短いのかもしれない。

「えつと、じつじつじつ」

凪子が雑誌を見ながら歩き出す。

「ちょい待ち」

凪子のコートに付いたフードを引っ張る。

「あつちでしょ」

えー？ と言いながら、凪子が雑誌に描かれた地図と、今の場所を見比べる。

「ほんとだわ。真潮大先生」

凪子を一人で来させないでよかつたよ。

恵比寿の街は雑多な感じがする。

街の名前の聞こえよりは、おしゃれな街ではない気がした。

そんな恵比寿の街を凧子と歩く。

つんのめりそうな速い勢いで、凧子が歩くのが可笑しい。

目的地の会場に近づいてきた時、色とりどりの紙袋を持った女子たちが、俺たちとは反対に駅に向って歩いてくるのが見えた。

腕時計を見ると、もう昼近くになっていた。

「ああ～、十時に開場だから、チヨコもうないかも」

泣きそうな顔で、凧子が言つ。

「あ。まあ、そうしたら、その時だ」

無いもんは無いんだから。

会場は大きなイベントホールで、建物に入るとすゞい熱気だった。

入り口で、透明なビニールの袋と会場案内図を貰つた凧子は、そのまま動けなくなってしまった。

「ほれ。行きたい店あるんだろ？ 行くぞ」

凧子の背中を押す。

「ひ、怖い

「怖い？」

「人が沢山いすゞぎる」

入り口とレジは、会場から数段高いところにあった。

だから、会場の様子がよく見渡せて便利だと思ったけど、日頃見慣れない人の数に凧子はビビッてしまつたようだ。

会場の端に凧子を連れて行く。

勝手知つたるなんとか、といつやつで凧子の鞄からマーカーを出す。

「凧子が買いたいチヨコの店を、このマップに印しな。買つてきてやるから」

マーカーのキャップを開けて、凧子に渡す。

凪子は、はつとしたような表情になつて、そしてマーカーで印をつけ始めた。

その店の数は七店にもなつた。

つてことは、七人にあげるつてことか？

まあ、それはそれでいいとして。

「で、どんなのを買えばいいんだ？」

凪子からチヨンフを賣うヤツも、まさか野郎がそれを買つたなんて知つたらさぞかし驚くだらうとな、と思つ。

「真潮」

凪子が呼ぶ。

「なんか、落ち着いてきた。私、自分で行けるわ」

そう言つて、マップを持つて歩き出そうとする。

「ついて行くなよ」

俺も凪子の側に並んで歩いりつとした。

「大丈夫だよ、一人で」

凪子がそう言つ。

そして、マップを広げて会場を見下ろしながら

「最初に、ここに行つて、次にここでしょ」

次は、と地図を指でなぞりながら凪子は七店へのシユミレーシヨンをした。

「私、行つて来るから。だから、真潮はここで待つてね」

と言つて、凪子がコートを脱ぎだした。

細い体が、中から出てきた。

「これ持つてて」

と言つてコートを俺に渡してきた。

「あちこちの隙間をぬつて歩くには、この体型つて便利よ」

そう言つてにこつと笑つと、凪子はチヨンフ会場のフロアへと下りて行つた。

「ともかく寝る」

家のドアを開けながら、凪子が言った。

「俺も、何もしなかつたけど。なんか疲れた」
はいよ、とチョコの紙袋を凪子に渡しながら言った。

「『人アタリ』だよね」

「かもな」

「もう、一度と行かない。都会へは」

「だな」

全くの地元体質の俺たち一人は、きっと間違つても東京には生活の場を求めないんだろう。

「じゃあな」

凪子が玄関に入るのを見て俺は言った。

「あっ、真潮」

凪子が俺を呼んだ。

凪子は照れくさいような顔して俺を見ている。

「今日は、……ありがとう！」

そう言つと、凪子はバタンと勢い良く玄関の扉を閉めた。

夕飯も済んで、風呂から上がつたら凪子から電話が来た。
なんと、今から凪子の家に遊びに来い、だと。

「うひ。チョコくさい！」

凪子の家は玄関からもづ、チョコの匂いがした。

「いいから、はい、はい。上がって」

凪子が靴を脱いでもない俺の腕をグイグイと引っ張る。

リビングには、チョコのケーキやらクッキーやら（おまけに、噂の手作りポッキもどきとやらも）が、そして今日買ったと思われるチョコから、なにから全て揃つていて。

「なに、これ。一体どーこりう」と？」「まるでこれは、

「パーティよ。チョコレート パーティ」「だよな。

はいはい座つて、なんて言つて凪子にソファに沈められた。「あれ？ おじさんたちは？」

いつもは、いるよな。

日曜のこんな時間なら。

「ん。お母さんの調子が悪くてさ。今、おばあちゃんといふこいるんだ、お母さん。で、お父さんはそのお見舞いっていうか」

じゃあ、凪子は今日は、一人つきりなんだ。

賑やかな自分の家の隣りで、凪子は一人で過ごしていのなかと思う不思議な気がする。

「そつか。パーティだな。うん、で、何のだつけ？」

「だから『チョコ』のだつてば」

もう、真潮は〜と言ひながら、凪子が珈琲をいれ出した。

「これね。ゴーディバの珈琲だよ。チョコレーバー」

凪子の言葉とともに、すんごい匂いの液体が、目の前のカップに注がれた。

「徹底してますね。凪子さん」

溜息をつきながら、苦笑いをした。

「徹底しないとね、真潮さん」

凪子は、楽しそうに笑つた。

凪子が切り分けた、チョコ シフォンケーキを食べる。

凪子は、トリフチョコをつまもうとしている。

ん？

「すいませんが、凪子さん」

へつ？てな顔で、凪子がチョコを持ったまま止まる。

「それって。今日買ったチョコ？」

「えつ？ 何言つているの？ 当たり前じゃない」

そう言つて、凪子がチョコをポンと口に入れた。
俺もハムつとケーキを食つた。

ん？

「すいませんが、凪子さん。じゃあ、今日買つたチョコつてもしかして全部ここに？」

七人のチョコ侍への分は？と思ひながら聞く。

「そうよ。だつて自分で食べるためにはいにいつたんだもん」
ケロリとした口調で凪子が言つ。

「あげないの、チョコ？」

「チョコつて、チョコレートを？ 誰に？」

田をくづくづさせながら凪子がこいつちを見る。

「いやあ。誰にと聞かれて、俺も困るけど」

「じゃあ、今年は誰にもあげないってことか？」

「雑誌でバレンタインのチョコフェスティバルの記事を見つけてさ。
『ここに行けばいろんな種類のチョコが一気に手に入る』って思つて行つたんだけどなあ」

「待て」

待て、凪子。

「アンタ、去年と言つうこと違つてている」

「へ？」

「凪子は去年、自分の為にバレンタインにチョコを貰う入つていな
い』つて言つてたぞ」

「わー。去年の私つて、ホントおばかね」

次は何を食べよつかなあ、なんて、凪子はテーブルの上のチョコ
をあれこれ見つている。

そんな凪子を見ながら。

いつまでも、変らぬ思いに捕われて動けない自分の固さを思つた。

今なら。

言つてしまおうか。

凪子に。

自分の気持を。

「凪……」

「真潮、どう？ そのシフォンケーキ」

「えつ？ 美味いけど」

「甘くないよね」

「甘くないけど」

「よしつ！」

「はあ？」

「森永先輩つて、文化祭の委員でお世話になった人がいてね。その人つて、とっても親切で素敵なんだけど。で、その人が、チョコのあの口で溶ける感触は嫌いだけど、チョコ シフォンなら食べられるつて情報を得たのよ」

つまり、なんですか？

これは。

「だから、真潮にお味見してもらおうと思つて」

ギヤグ漫画なら、確實にここで『ギヤフン』って台詞が入るのだ
るつ。

でもな、俺は顔を真つ赤にしながら好きなやつのことを語る凪子
でも、可愛いと思つてしまふんだから。

だから、その『ギヤフン』はぐつと飲み込む。

「凪子は森永先輩が好きなんだね」

毎度、毎度、まるで自分の心の鍵を強化するように、その言葉で
凪子の気持の確認を取る。

そうしないと、さつきみたいに。

少しの隙間から気持が溢れ出そうになつてしまつかる。

「うん。好きよ」

。

これでまたじぱりく平氣だらう。

チヨコを手にとつて、口に運ぶ。

今年は誰の手にも渡らなかつたチヨコレートが、俺の体に入つていく。

そのチヨコの甘さが、ジンジンと骨の中まで染みいつてくへるよう^リで。甘いのこ、痛くなつた。

キス ホリック（前書き）

「サムシング ブルー」一人の高校編です。
恋愛要素を含む展開です。

キス ホリック

田中 真潮^{まつお}は、私の家の隣りに住む同じ年の男の子だ。

「ねえ、青柳さんって。田中と付き合つてこるの？」

物理の授業に移動中の廊下で、私の隣りにやつて来た椿谷さんが聞いてきた。

椿谷さんは、バスケもやれば勉強も出来ておまけに美人で有名なお方だった。

クラブも入つていなければ、勉強も好きじゃなくおまけに瘦せつぽちの私とは、当然あまり話したこともない。

「田中つていうのが真潮のことなら、付き合つていないよ」隣りを歩く椿谷さんにそつ答える。

「やつぱりね。やつなんだ。じゃあ、田中はフリーつてことよね」満足そうな椿谷さんの口調に、私はむかつときた。

「そんなことは、真潮に直接聞かないと分からぬでしょ」本人のいないとこでする会話じゃないって、椿谷さんは頭がいのに分からぬのかしら。

「まあ、ね、本人に聞かないと確實じやないわよね。でもさ、だつたらあなたは田中が誰かと付き合つているつて思つているの？」

鋭い切り返しで椿谷さんが聞いてくる。

「それは」

そりや、真潮が私以外の女と一緒にいるのは見たことがないけど

「」

でも、だからつ。

「そんなこと言つんなら、あなたが聞いてよ、田中に。あなただつて気になるでしょ？」

ぐつと言葉に詰まる。

そりや、真潮に彼女がいるかどうか、気にならないといつたら嘘になる。

「でも」

「じゃ、よひしべ」

そう言ひと椿谷さんは足早に物理教室に入つて、先に教室に来ていた先生ににじりと挨拶をして席に向つていた。

週番の仕事をしながら（相手の子は塾とかで放課後の仕事は私が一人でしていた）、階段にある窓から真潮が自転車で帰るのが見えた。

真潮も今日は塾なんだろう。

私には信じられないけど、真潮も勉強が好きな人種の一人のようだつた。

真潮は、自転車で学校に来ていた。

朝、遅刻しそうな時は私もたまに（しばしば、かな）後ろに乗せてもらつたりする。

私の、真潮の自転車の後部席の歴史は長い。

初めて乗せてもらつたのは、小学四年生の時だつた。

その年の誕生日に真潮がもらつた自転車は、私のピンクのそれとは違うタイプの自転車で、とてもオトナの感じがしたのを覚えている。

そしてそれを見て、ああ、真潮は男の子で私は女の子なんだな、やつぱり違うんだな、と思つたのも覚えている。

それは、私にとつてはショックなことだつた。

やつぱり違うんだ、というのは私にとつてはとびぬの一発だつた。

そして一度『やつぱり違う』と頭の中で針が傾くと、その違いの全てが明らかになり私の目の前に広げられて、提示され、そしてそ

れを自覚することになった。

まずは、学力。

当然、体力。

そして、性格。

とどめが、家族。

その中で一番堪えるのが家族のことだった。

真潮にはお姉さんが一人いた。

お隣りだからその声は良く聞えて、それにお母さんの声も加わると、真潮の家はとても賑やかになった。

テレビの中のホームドラマみたいな家族だった。

憧れた。

私は一人っ子だった。

母はもとから体が弱くて、ようやく生まれたのが私だったようだ。

小さい頃から、うちは母が中心だった。

母の具合によって、家族のいろいろが決まっていった。

いろんな家族があるから、本当にそれぞれなんだけど。

そう思える時と、それを上手く心の中で処理できない時があって、

私は時折気持ちが不安定になっていた。

私が不安定になると、母も不安定になつて、父が帰つて来るまでの時間がとても長く感じられてしまうこともあった。

でも、真潮と一緒に遊んでいる時は、そのことを忘れられた。

私の家族も真潮の家と同じように明るく楽しく賑やかなんだって、そう自分の心を騙すことができた。

私をそうさせる力が、真潮にはあるように感じた。

母や父が言つてもいない冗談を、真潮にさも両親が言つたかのように話して笑わせたりした。

そして、そんな風に自分の家族について嘘をついてしまつ自分に

自己嫌悪を感じたりもした。

こんなことは間違つてゐると思いながらも、止められなかつた。

そんな時、チョコレー^トを食べると気持ちが落ち着く時があった。

段々とまるで自己暗示の様に、不安なことがあると私はチョコを買いに行つたり食べたりするようになつた。

真潮の新しい自転車を見た日、私はお小遣いを持って近所の駄菓子屋にチョコを買いに行つた。

真潮の自転車が、私を不安にさせたのだ。

私の自転車では行けない、そして私が行きたいと思う遙か彼方の明るいところまで、真潮にはなんの苦労もなく行けるんじやないかつて思つた。

そして、焦つた。

真潮に置いていかれたくないと思つた。

真潮よりも先に、私は自分の行きたい場所を見つけて行かないといけないつて思つた。

何でも、真潮よりも先に。

真潮がそんなことに気がつかないよりも、先に。

「真潮」

夕食が終わつてから宿題を持つて、真潮の家に行く。

宿題だけではなく、お菓子の入つた袋も持つて。

玄関で真潮のお母さんに挨拶をして紅茶の載つたトレイを受けとると、私は二階に上がつた。

階段を上がりながら、「真潮～、真潮～」と名前を呼んだ。

「全く。アンタは、豆腐屋か」

私が部屋の前に行くよりも前に、真潮の部屋の扉が開いた。

「えつ、お豆腐屋さん？ 私は『真潮～ いらんかねえ～』なんて言つてないし、ラッパも吹いてないよ」

そう言いながらも、真潮のそんな切り返しが楽しくてしようがな

かつた。

「はいはい、ともかくそこは寒いから早く中に入りな」

真潮が手招きをする。

そして、手で前髪をぱつと後ろにせせた。

「真潮。前髪が長いねえ」

紅茶を部屋にある小さな机に置きながらそう言った。

「そりなんだよなあ。明日でも切りに行こうかって思つてはいるけどね」

「いつぞ、角刈りにすれば」

私は、自分の指定席のクッションの上に座る。

「一生言つてる」

そう言いながら真潮も床に座つた。

「なにまた、新作？」

私が袋に入ったチョコを持つてているのを見て、真潮が聞く。

「うん。食べようよ」

「まずは、勉強してからだね」

そう笑いながら真潮は紅茶を注いでくれた。

宿題と予習が終わつたあと、お菓子を食べながら真潮と学校のことを話した。

高校になるとクラスが違つても選択の授業が多いから、あれこれと共通する友達関係なんかがあつたりするのだ。

「凪子は、家庭科の授業をとつていたっけ？」

真潮が生チョコを食べながら聞く。

「うん。この間、クリスマスケーキを焼いた」

「ううううう。そう聞いたんだけど、それってどんなの？」

「真潮はきっと嫌いだよ。洋酒につけたドライフルーツがぱちり入つたやつだもん」

「わあ、確かに」

「あれつて日持ちはするんだけどね」

「あれ系のケーキって、結婚式の引き出物の中にも入っているよな

「やうなの？ ジャア、結婚が長持ちするよ！」って願いがあつてじゃない？」

「いや。それよりも、俺は結婚式場の都合じゃないかと見た」

真潮はそう言つと、紅茶を飲んだ。

結婚、か。

「ま、真潮はさあ

「ん？」

結婚の前は恋愛つてことで、無理やり話の糸口を見つけた私は、今回の使命（つて、別に椿谷さんに言われたからつていうよりも私が気になるんだけど）をまつとつすべく話を切り出した。

「いたつけ、彼女

「はあ？」

真潮が、ぽかんと口を開けたまま私を見ている。

「いたつけ？ 彼女

もう一度同じ事を聞きながら、私は苺チョコのついたクッキーをつまんだ。

どつきん、どつきん、心臓が痛いほど体の中で跳ねている。

今まで、どの男の子に告白した時よりもすごい勢いだ。

真潮の顔が見られない。

これじやあまるで、私は真潮に告白でもしようとしているみたいじゃない。

「……なんで？」

真潮の低い声が聞える。

やばい。

これはめつたにない真潮の怒りモードの声じゃない。

「な、なんですかと言つと

椿谷さんの顔が浮ぶ。

でも、ここで椿谷さんの名前を出すのはいくらなんでも彼女が気

の毒な気がした。

椿谷さんは真潮が好きなんだろつたび、そのことを真潮に私から言つてもいいんだろうけど、何もこの怒りモードの真潮にわざわざ言つ必要もないと思つた。

それは少し意地悪だと。

「ほら、私。こうして真潮と一緒にお菓子を食べたりとか、朝に自転車に乗せてもらつたりとか」

私がそう説明したと、真潮の顔から怒りが段々と消えていくような気がしてきた。

そしていつもの、穏やかな真潮の顔に戻つていくような。嬉しくなった。

もし私が犬なら、真潮の前でしつぽをたくさん振つている状態だと思う。

「そうそう、凪子に教科書を貸してあげたりとか、宿題を教えてあげたりとか。もしかして、俺つて現代を生きる天使か？」

真潮がそう言って笑つた。

「でもさ、アンタが俺に『体操着を貸して！』って教室に殴りこみに来た時には、流石に気絶しそうになつたよ」

「だつて、あれは。私つて、忘れ物をしたらとにかく真潮のところつて思つてるもんだから。でもね、言い訳をさせてもらえるなら、真潮に頼みながら自分でも『男子に体操着を借りてどうなる。頼む相手が違うだろ？』って気がついたのよ」

今、思い出しても恥ずかしい。

自分のクラスの授業が終わつたあと、急いで真潮のクラスに飛び込んでそのことを叫んだら、まだ真潮のクラスは授業中で。

しかもその授業がうちの担任がしていたもんだから、こっちのクラスにまでその話が広まつて。

『青柳 凪子は男の体操着を着る女だ』と、しばらくからかわれたものだ。

再び蘇るあの恥ずかしさを誤魔化すように、私はまたクッキーを

食べた。

「つまり、俺に彼女がいたらいろいろと遠慮しそうと凪子サンは思つたわけだ」

「うん」

うん、なんて答えながら私はとても後悔していた。

真潮に彼女がいるつてことは、私の生活にも多大な影響を与えるつてことに今さらながらに気がついたからだ。

今まで、真潮が女の子に興味があるとか（だからって、男の子に興味があるとは思つていなかつたけど）あまり考えたことがなかつた。

うちの学校は、男女仲はまあいいけど、付き合つている人たちつてあまりいなくて。

だからか、余計にそんなことを考へることはなかつたのだ。

「彼女は、いないよ」

真潮が言つた。

「ふーん」

ふーん、なんて気の無い言い方をしながらも、心の中で私はガツツポーズをしていた。

「そうか、いないの。真潮つて、好きな子」

ほつとしながらそう言つて真潮の顔を見たら、真潮はヘンな顔をしていた。

あまり見ない表情。

「真潮、悲しい？」

真潮の顔を見ていたら、そんな言葉が出てきた。

「なんじゃ、それ」

そう言つて真潮が笑つたので、私もなんとなく笑つた。

でも、あの表情は忘れられなかつた。

「彼女、いないって」

朝、椿谷さんに会うなり私はそう言った。

椿谷さんは一瞬驚いた顔をしながらも、こくりと笑つて「本当に聞いてくれたんだ。イイヒトなんだ。青柳さんって」と言った。でもそう言いながらも段々と怖い表情になつていつて「でもなんか、腹が立つな。青柳さんって」と言つと、側にいたクラスメイトを誘つてトイレに行つてしまつた。

昨晩、帰り際に真潮から駅向こうに新しいケーキ屋が出来て、そこはチョコ関係が充実しているらしいけど連れて行ってやろうか、つて言われた。

勿論、二つ返事でOKしながらも、少しだけ椿谷さんのが気にもなつた。

気にはなつたけど、チョコの魅力の前ではその『気』も二の次になつてしまつた。

今日、椿谷さんはかなり感じが悪かつたので、OKしてよかつたわあ、なんて私は意地悪なことを思つた。

けど、その意地悪さの天罰か、放課後に週番だった私は担任に呼び出され、雑用をあれこれと頼まれることになつてしまつた。

真潮は真潮で、委員会関係の担当分の印刷の仕事が少しあるとかで、お互に早く終わつた方が自分の教室で相手を待つてているという待ち合わせをした。

「青柳。明日からの体育の産休の先生がいらしてるので、挨拶していくか？」

用事が終わつた私に、担任の先生が言つ。

「ええと。はい」

新しい人に会うのは苦手だけど、まあいやと思いつた担任の後に続

いた。

職員室の反対の出口の側にあるソファには、大きな男の人と産休になるお腹の大きくなつた先生が座つていた。

「先生、明日からお願ひするクラスの一人、青柳ですよ」

担任がそう言つと、大きな男の先生は立ち上がり、「よろしく」と言つた。

そして「青柳つて」とつぶやくと、大爆笑した。

私は何がなんだかわからなくて、呆然とその先生のことを見ていた。

「ああ、青柳さんつて女の子がいて、その子が体操着を忘れたんで彼の体操着を借りようとしてたつて話を今聞いたところだつたんで。で、キミでしょ、その子つて」

またそのネタですかい、と顔を赤くしながらも担任と産休に入る先生を見た。

先生たちも笑つていた。

「いやあ、この青柳とその彼氏の田中は本当にいいカップルでね。いわゆる『ほのぼの系』つてやつですか?」

担任が言つ。

「いやあ、なかなか。青春ですね。羨ましいなあ」

そう言いながら、産休で来た男の先生がにこりと笑つた。

あらま。この先生は、イイかもしない。

本当だつたら真潮と私がカップル(しかし『カップル』つて)だ
というのを否定する場面なんだけど、その先生の笑顔が中々素敵なのでついつい忘れてしまつた。

ヒットかもよ。この先生。

椿谷さんや、真潮のことでもやもやとしていた気持ちが、ぱつとそつちに切り替わつた。

ああ、真潮に報告しないと、と思い教室に戻る足取りが軽くなつた。

下校時刻を少し過ぎただけで、どの教室も誰もいなくなつてしまつていた。

グラウンドからは体育会系のクラブ人たちの声やボールの音が聞えていた。

自分のクラスを通り過ぎ、真潮のクラスに着く。

そつと部屋を覗くと、真潮が椅子に座り腕組みをしたまま窓に背を向けるようにして眠っているのが見えた。

もう、そんなに暖かな日差しとはいえないけれど、真潮の背中にはそれでもとても暖かそうに太陽が降り注いでいた。

それは、とても正しい姿の様に思えた。

真潮は、優しい。

真潮は、正しい。

そんな真潮に、太陽は良く似合つ。

途端に私は、私は真潮にとつては正しくない存在だと思えてきた。

勉強だつて嫌いだし、自分勝手だし。

忘れ物だつて多いし、お菓子ばかり食べているし。

きつと真潮の側には、椿谷さんみたいな人が似合つんだと思う。椿谷さんは意地悪かもしれないけど、間違いなく真潮のことが好きで。

おまけに、頭だつていい。

それにきつと家族だつて。

そう思つたら、急に焦つてきた。

真潮には正しい相手がいるのに、私にはいない、と。

真潮に近づく。

長い薄茶色した前髪が目といひまで下りてゐる。

「ばかな、真潮」

私のチョコを買つのに付き合つよりも、自分の髪を切ればいいのに。

ばかで、優しく、善良な田中真潮は、自分よりも人を優先させる。

そんな真潮の存在が、世界一大切なものに思えた。

ふと、真潮の唇にキスをした。
かかる程度の、かすかなキスを。

真潮への気持ちは、とてもシンプルなものだと思っていた。
でも、違うのかもしれない。

好きな男の子は今までたくさんいて。
ドキドキだつてしていたし、眠れないほどその人のことを想つことだつてあつた。
気持ちはいつも、これまたシンプルで、「好き」って気持ちしかなかつた。

好き。

いつも、好き。

真潮に対しても勿論「好き」な気持ちはあった。

友だち。

幼なじみ。

家族ぐるみの御付き合い。

信頼できる人。

真潮は、わざわざ「好き」なんて言葉を言わなくてもいい相手だった。

でも、違うのかもしれない。

でも、それは困る。

そう考えると恐ろしくなった。

そんなフクザツなことは私には向かない。

「好き」って感情はいつもシンプルでいてくれなきや。

さつき会つた、産休で来た先生に感じた感情を思い起こす。

単純で、簡単で、明るく、楽しい感情。

私にはそれがベストだった。

家族のあれこれを抱えた私には、もうそれ以上フクザツな感情を受け入れるキャパはなかった。

真潮は起きない。

寝息もたてないで眠つてゐる。

誰もいない教室。

「真潮」

私は、次に出できそつた言葉を心の一一番奥底の番外地の冷たい土の中深くに埋めた。

埋めた私でももう掘り出せない程に深く。

「……う、ん」

真潮が目を覚ます。

私は、さつきキスした真潮の口を、両手でぎゅっと引っ張つた。

「うげげつ。な、なに？」

真潮がびっくりした顔で私を見てきた。

「悪い魔女からの消毒でござります」

自分のキスの形跡を消すように、私はそつした。

いてて、なんて言いながら真潮が席を立つ。

そしてそのあと、真潮と二人で私の教室に寄つて鞄を取つてから、

今日の目的地であるケー・キ屋へと向つた。

おかしい。

とてもへんだった。

いくらケー・キ屋さんでチョコを買つても、全く心が晴れない。

しかも、私はチョコよりも、何よりももう一度真潮にキスがしたいなんて、そんな不条理なことを考えてしまつてもいた。

自転車をこぐ真潮の背中を見ながら私の頭の中には、繰り返しこんなへんなことが浮んでしまつた。

チヨ「なんていらないから

キスして真潮

たくさんのキス

さつきのみみたいなキスじゃなくて

恋人みたいなキスを

真潮

「凪子、具合でも悪いのか？」

黙つたままの私を心配したのか、真潮はそう声を掛けってきた。

「わ、私。実は、またまた好きな人ができそうなんだ」

それは好きな男の子が出来たらいつも真潮に報告してしまつ私の、恒例の台詞。

もし今、真潮に「誰？」って聞かれたら、私は『誰』って答えるんだろうって思った。

もし、真潮に聞かれたら。

もし、万が一聞かれたら。

真潮だよ、って言ってみよつか。

そう言つたら、真潮はどうするだろう。

私たちは、どうなるのだろう。

好きな人ができそうだ、という言葉を聞いて真潮は一瞬間があつた後に、「へえ」言つた。

そして、「今度は、うまく行くといいな」と言つた。

その声も答えも、やっぱり私の幼なじみの優しい真潮のもので。

落胆しながらも、どこか私はほつとしていた。

そして、それが、やっぱり私たちの正しいポジションなんだと思

つた。

誰を好きになつて誰と駄目になつてもいいけど。

真潮だけは、離したくないと思つた。

私の心中にある、好きだと、恋人になるとか、そういうつたことを全てと関係のない綺麗な箱の中に、真潮にはいてもらわないといけないと思つた。

だから。

やつぱり、いらない。

欲しくない。

真潮のキスは。

恋人のキスなんて、真潮からは欲しくない。

暗くなつた海沿いの道を、ライトをつけた自転車が真潮と私を乗せて走る。

ゆつくりとカーブを曲がり、自転車はなだらか坂を下りて行つた。

そのゆつくりとしたなだらかさは、私の中で萌生え喪失していく感情とも似て。

私は、暗闇に紛れて。
真潮の背中で。

……少しだけ、泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7007p/>

サムシング ブルー

2011年4月28日12時40分発行